

第5回交流部会（12/18）  
議事録要旨

観光資源として食と景観の魅力づくりをどのように発展させることができるのか意見をいただきたい。

食と景観だけではどこにでもあるものなので、形容詞や特色を出すことが大切である。

帯広の銭湯は、390円の温泉でサウナもあり、とても贅沢であり、観光客をロングスティさせるためには、ライフスタイル型の提案、つまり、食事、温泉、アウトドアなどの具体的な提案が必要である。

最近、個人の情報発信型が注目されているが、これをどう発信していくかが重要である。また、豚丼に次ぐ、第2のご当地グルメを多くの人に関り、作っていくことが必要である。

道産小麦の天然酵母で作ったパンだけでは、当たり前でロマンがない。とかち帯広の食には、独自性のある情報発信が必要であり、シチューや菓子も題材として良い。

統一したキャッチフレーズやイメージづくりが必要であり、発信していくことが大切である。

新しい郷土料理の開発は昔の考え方ではなく、新しい発想や物語が必要である。

十勝帯広の食の安全・安心を裏付けるため、検査機関を設けたり、景観を保全していく仕組みを考えるべきである。

観光資源を絞って、具体的に発信し、市民が育てていくことが大事である。

性別・年齢層が違えば興味も違い、求める情報も違う。情報の輪を広げていくことが必要である。

食については、市民から公募によりアイデアやレシピを募集し、富良野のカレーや定山溪のアンコウのように市民参加型の取組みや、とかち帯広のシテイPRについても、市民を巻き込んで街ぐるみで運動することが重要である。

札幌市のホームページの運営はNPO法人が行なっていて、ホテルの取材や生の声を掲載している。とかち帯広の名称を使って、観光ではなくロングステイとして、料理、銭湯など素材は豊富にあるので売り込んでみてはどうか。

食については、豆も取り入れるべきである。四季折々の景観と食の話題性を  
つくり（ニュースバリュー化し）、テレビ局とタイアップを図るなどPRし、来  
てもらい北海道では住みやすい「とかち帯広」に移住してもらうように取り組  
むべきである。

観光客にとって、良い街とはどのような街を求めているのかを考える必要が  
ある。食の場合には、消費者は食品添加物など食生活に疑問をいただいている状  
況にあり、目指すことのテーマが大事である。

十勝川温泉は、素泊りはだめであり、連泊できる体制になっていない状況に  
あり、ロングステイの推進のためには、ホテル業界の協力のもと、十勝は広い  
ので連泊体制をとってもらうことが必要である。

風景と食をPRするには、映像を用いることが良いのではないか。

ご当地検定資格を持ったシティガイドがいるホテルやレストランを多くし、  
ホテルやレストランにツアーデスクを担ってもらうと良いのではないか。

十勝管内のホテルは、サホロを除いて、オプションツアーはあまり行われ  
ていない状況にある。

ホテル業界と連携して、ロングステイに繋がる商品開発の取り組みが必要で  
ある。

鉄道、バス、レンタカーの交通を組み合わせ、サイクリング、フットパス、  
アウトドアで「とかち帯広」を楽しむメニューづくりを実践してみてもどうか。

市民ひとりひとりが観光ガイドとなり、お客をもてなす、ホスピタリティー  
の充実を図るべきである。

十勝になく、帯広にあるコンベンションに来られた方に、もう1泊していただ  
く取り組みを実践すべきである。

サイクリングについては、十勝は坂が少なく、コースもわりあい整備されて  
いるので、サイクリング協会にコースを設定してもらうと良いのではないか。

こういう楽しみ方があるというものを出し合い、伝え、業界と連携するとお  
もしろい取り組みができるのではないか。行政がやるべきことは、事業や取組の  
権威づけ（ステイタスづくり）である。

正直情報として原産地表示をすることが、十勝の食のPRに繋がり、トップ  
ランナーの取り組みになるのではないか。

出来ることから少しずつで構わないので、飲食店は、地場の食材や産品であ

る十勝ワイン、道産の日本酒、おぼろづき（道産米）などを提供していくことが大切である。

空港における観光案内機能を強化すべきである。

行政には、観光ガイドと食の取り組みをぜひ検討していただきたい。

以 上